

海員時事

千足耕一（東京海洋大学海洋政策文化学科・教授）

海気を感じる

私は大学教員として東京海洋大学に勤務しています。大学の授業には、海での遠泳やシーカヤック、スノーケリング、スキンドайビングなど、海と直接的に触れ合う活動を取り入れています。また、研究室活動においては沖縄伝統漁船の帆かけサバニにも取り組んでいます。

このような授業や活動を展開している際に「海気」という言葉が最近使われなくなっているというのを、海洋ジャーナリストの内田正洋さんがおっしゃっていました。日常においては、「空気を読む」といった言葉が多く使われており、「周囲の空気を読む」といったような人間社会の中での空気（雰囲気）という意味で多く使われているように思います。最近話題となっていた森友学園問題では「忖度^{まんだ}」他人の気持ちをおしはかること」といった言葉が多用されたのも記憶に新しいところです。空気を読んで、人の気持ちをおしはか

ることができることは人間社会で生きる術なのだと思います。一方、アウトドアでの活動における「空気を読む」とは「自然環境の変化につながるような空気、大気の状態など」を読む、「海がどういう状況なのか」といった海気を読む」といった意味合いが強く、自然の中で生きる術に関わるものではないでしょうか。船の労働や船内生活にも同じように、船の中の人間関係を円滑にすることや自然に対応した行動をとることが求められると思います。

海の活動に携わり、海で働くものは、海と付き合っていくための基本として、感性を高めて海気を感じる必要があるのではないのでしょうか。そのためには、直接的に海に触れておくことは非常に重要ではないかと思っています。本稿では、このような活動や考え方の一部を紹介したいと思います。

逆風・逆流を進む体験

2017年の夏は強い潮の流れに向かって進む体験、逆風に向かって進む体験をしました。沖縄伝統漁船の帆かけサバニに取り組んでいます。梅雨明けにサバニを用いたレースが開催されており、その中で何度か強い潮に遭遇しました。サバニは、ヨットのようない帆掛け船なので、大きなキールのない帆掛け船なので、風に向かって走るクローズホールドで帆走することが難しいことは容易に理解できると思います。エークと呼ばれる櫂^かを用いて漕ぎ進むのです





が、強い潮流に向かって漕ぐことはかなり厳しいものでした。

直線距離約36kmの海峡横断レースでは、沖縄の座間味島・古座間味ビーチを出発して渡嘉敷島の北・儀志布島を抜けるあたりから那覇に船首に向けて進みたかったところでしたが、2時間ほど、ほとんど同じ位置で漕ぎ続ける体験をしました。他の船も同じように、ほぼ同じ位置で漕ぎ続けていました。流水プールで泳ぐとか、ネズミが輪を回して同じ位置にいたようなことをイメージしていただければわかりやすいかもしれません。このとき感じたことは、「自分たち人間は、あまりにも小さく、自然はあるがまま、厳しい」ことで

した。逆流に向かっていくことや工夫することはなんとか出来るのですが、広く情報を収集することや、より大きな力を付けることの必要性を強く感じました。

もうひとつの逆流を行く体験は、トライアスロンのレースにおける体験です。海岸に対してL字型を往復するコースで、左手前から右沖に向かって、かなり強い流れがある中で2・5kmスイムでした。往きは20分、帰りは1時間10分もかかるものでした。この時も、逆流でほとんど進まない中、ひたすら生き延びてレースを継続するために泳ぎ続けるだけでした。川を遡上する魚のように、泳いでいるのだけれどもほとんど位置は変わらず、息継ぎの際に見える景色もほとんど同じでした。泳ぐのをやめると、流されるのみです。この時も、「自分たち人間は、あまりにも小さく、自然はあるがまま、厳しい」ことを感じました。

このような2つの事例を経て、自分の中には、無心で泳ぎ、あるいは漕いだ体験が残っています。自然を相手に驕ってはいけない態度が自然と身に付くことにつながっています。また、このような「何とかしなければ」「工夫しなければ」「力をつけよう」といったようなこと

を感じさせてくれる体験は、自分の力で生きているような何とも言えない充実感を与えてくれるような気がします。

シーカヤックとスキンドайビングを用いた授業の事例

私の所属する東京海洋大学海洋政策文化学科では毎年、沖縄にてシーカヤックとスキンドайビングを用いた授業を開催しています。シーカヤックとスキンドайビングを教材として用いる意義は、それらが極めてシンプルだからという理由です。また、

水中環境に触れるものです。沖縄特有のサンゴ礁環境で、素晴らしい海中の景観や多様な生物を見ることが出来ます。今年度の実習では、片道8kmの日帰りツーリングを実施しました。流れと風向きが逆の状況で三角波が立ち、地形も合わさって作り出される1・5メートルの高さの波を越えて、全員無事にカヤックを漕ぎ、無人浜でのスキンドайビングを実施することができました。

これらの経験は、全て「自然」に直接的に触れるものであり、自然の素晴らしさ、厳しさを感じさせてくれます。

授業を終えた学生の感想では、「海に対する心構えが変わった」「自分

います。シーカヤックは自力で漕ぎ、海面を進むもので、風や波、流れなどの影響を強く受けます。シーカヤックでは、海に出るための適切な服装を準備し、パドリングの基本的技術を身につけ、転覆した時の対処法を学びます。ある程度の技術を身につけたら、水や食料、素潜り用具などを船内ハッチに入れて小旅行します。カヤックでしか行けないような場所に到着したら、素潜りを実施します。素潜りは自分の息こらえの範囲で、水圧に抗して潜り、直接的に





の身の安全を守るために最も大切なことは、海の情報を得ることである」
 「時間毎に刻々と変化する海の状況に対して、波の高さ、風速、天候といった様々な情報を的確に分析し、判断する能力の大事さを知った」
 「一人で波の向き、大きさや周囲のカヤックの状況などを判断しなければならず、自分の置かれた状況を客観的に確認する能力の向上に役立った」
 「カヤックで一緒に漕ぐことで会話が生じ、必然的に対人関係スキルが鍛えられた」
 「タンデム（2人乗りカヤック）では、コミュニケーションや対人スキル、自己認識など、人間関係的な要素を多く感じとった」
 「シーカヤックやシュノーケリングのバディ行動も協調性を育む事に関

連していた」「つらい状況であっても、前向き思考でそれを乗り越えることができる」といったものがありました。

このようなシンプルな活動経験を多く含んだ授業を展開する中で、学生が前向き思考を身につけ、海気や空気に対する感性を高めて、しなやかに生きる術を身につけてほしいと願っています。

千足耕一 プロフィール

1966年4月神戸市生まれ。東京海洋大学海洋政策文化学科・教授。専門分野は海洋スポーツ、海洋性レクリエーション。1989年筑波大学体育専門学群卒、1992年同大学院修了、2003年学位取得（博士・医学Ⅱ東邦大学。筑波大学体育センター、十文字学園女子短期大学、鹿屋体育大学海洋スポーツセンターを経て現職。日本海洋人間学会、日本野外教育学会、海に学ぶ体験活動協議会等の理事を務める。
 著書に「水辺の野外教育」(杏林書院)や「スキンドайビング・セーフティ」(成山堂)他。海上労働や海洋での身体活動に関する研究活動(論文執筆や科研費による調査活動)を継続的に実施しつつ、大学での教育活動を実施している。

